ゴアの印刷メディアと言語状況

鈴木義里（すずきぎり）

[要旨]

この発表が目指すのは、ゴアの印刷メディアとゴアの言語状況を明らかにすることである。2001年のセンサスによれば、ゴア州の有力言語はコーンカニー語（57.1%）、マラーティー語（22.6%）、ヒンディー語（5.7%）、カンナダ語（5.5%）である。しかし、印刷メディアに関しては、コーンカニー語のものを目にする機会は極めて少ない。英語が他の言語を圧倒しており、他にはマラーティー語のものが多少目に入る程度である。なぜこのような状況になっているのだろうか。

1961年12月に解放されるまで、植民地ゴアではポルトガル語の使用が強制されていた。ポルトガル統治下では、ポルトガル語を身につけない限り中等教育に進むことはできなかった。植民地時代には、ポルトガル語を教育言語とする学校以外にマラーティー語の学校もあったが、上級学校に行くためにはポルトガル語の知識は必須であった。また、コーンカニー語の学校も皆無ではなかったものの、その数は限定的だった。

したがって、ポルトガル統治下のゴアの人びとは、主にポルトガル語とマラーティー語で識字を身につけることとなっていた。その結果、ポルトガル語は主にキリスト教に改宗した人びとの間で、マラーティー語はヒンドゥー教徒の間で読み書きに使用されていた。カトリック教会ではローマ字を使ったコーンカニー語の聖書も出版していたとはいえ、コーンカニー語は話ことばとして用いられる言語だった。新聞や雑誌はポルトガル語とマラーティー語のものにほぼ限られていたが、隣接する英領インドから英語の書籍や雑誌も流入していた。

植民地下の公用語はポルトガル語だったが、1961年の解放以降は、インド共和国の連邦公用語であるヒンディー語と英語がそれに取って代わることになった。特に、行政と教育においては、英語がポルトガル語の地位を受け継ぐことになった。印刷メディアにおいてもポルトガル語から英語へとシフトした。マラーティー語は解放後も、主にヒンドゥー教徒の間で書きことばとして使用され続けた。この背景には、隣接するマハーラーシュトラ州の州公用語であるという事情も関与している。他方、話しことばとしては、従来と同様、クリスチャンであるかヒンドゥー教徒であるかを問わず、コーンカニー語が主に用いられていた。

このような言語状況に変化の兆しが表れたのは、1987年2月に公用語法が成立して以降である。同年5月には連邦直轄地から25番目の州へと昇格したため、その公用語法はそのままゴア州公用語法となった。コーンカニー語はマラーティー語の方言に過ぎないとする人びととの論争を経ての結果だった。かくして、ゴア州の公用語はデーヴァナーガリー文字のコーンカニー語と規定された。そして、それに伴って公立学校の教育言語はデーヴァナーガリー文字のコーンカニー語で行うことが義務づけられた。

この政策が順調に行けば、コーンカニー語が印刷メディアの中でも一定の割合を占めることが予想された。しかし、デーヴァナーガリー文字を用いたコーンカニー語に対しては、コーンカニー語推進派内部から異論が出されるようになってきた。クリスチャンを中心にローマ字を用いてコーンカニー語を書いてきた人びとが少なからずおり、彼らがローマ字のコーンカニー語も公用語として認めるべきだと主張し始めたのである。

さらにそこに追い打ちをかけるように、公立学校でも英語を教育言語として用いることを求める運動がこの数年高まり、とうとうそれが今年（2011年）の夏に実現した。すでにかなり以前からグローバリゼーションの流れの中で、世界的に英語の地位が上昇してきており、インドでもゴアに限らず英語による教育を求める声は高まっていた。富裕層の子弟は私立学校で英語による教育を受けることができたが、そうでない人びとは地域語（州の公用語）での教育を強いられていると主張する人びとの声が高まってきていた。母語による教育が理想であるという教育学者たちの声よりも、社会的・経済的な豊かさを約束するかに見える英語による教育を求める声の方が強かった。両派の激しい論争や運動の末、公立学校でも英語による教育を選択する自由が認められることになった。

かくして、ゴアでは半数以上の母語であるコーンカニー語の印刷メディアは、州の公用語化という追い風に乗って発展の兆しを見せたものの、その機会を十分に生かし切れないうちに、極めて危うい状況を迎えてしまった。これが、冒頭で述べたような今日のゴアの印刷メディアの状況を生みだした原因と言えよう。英語推進派の人びとは、コーンカニー語は、450年もの長いポルトガル支配の下でも話ことばとして生き抜いたのだから、書きことばとしては英語やマラーティー語に譲っても言語として消えるはずはないと主張している。しかし、そのような楽観的な見方をしていてよいかどうかは、未知数と言わなくてはならないだろう。